

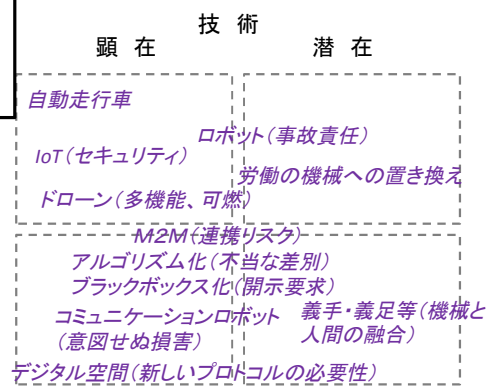
資料1-1
安全・安心科学技術及び社会連携委員会(第9回)
H28.3.30

人と情報のエコシステム(仮)

背景と問題

- 現在、世界的なネットワーク化が急速に進み、IoT、ロボット、人工知能といった情報技術が社会システムの中に実装され始め、より豊かで効率性の高い社会が実現されるとの期待が高まっている。
 - 一方、情報技術は「悪意に基づく事故や事件(テロ、犯罪など)」「予期せぬ事故やトラブル(セキュリティ、プライバシーなど)」「経済格差拡大や資本集中」などの様々な問題をもたらすとの指摘もなされ始めているが、こうした予測については専門家の間でも見解が分かれているのが現状である。(*1)
 - そうした中、英米では、人工知能に関する研究プロジェクトやセンターが(Future of Humanity Institute (FHI)、The Future of Life Institute (FLI)等)、人的ネットワークを介して互いに連携しながら、来るべき未来社会の在り方について議論を進めている。(*2)
- そのうちFLIは、Elon Muskの1,000万ドルの寄付によるファンドを立ち上げ(2015年1月)、「AIをより有能にする研究」だけでなく、「AIの社会的利益を最大化する研究」を行うという指針のもと、37のプロジェクトを採択し研究活動を始めている。(*3)

- 我が国においても、情報技術を研究開発の上流の段階から人間を中心とした観点で捉え直し、社会の理解のもとに技術と制度を協調的に設計していく必要性が高まっている。



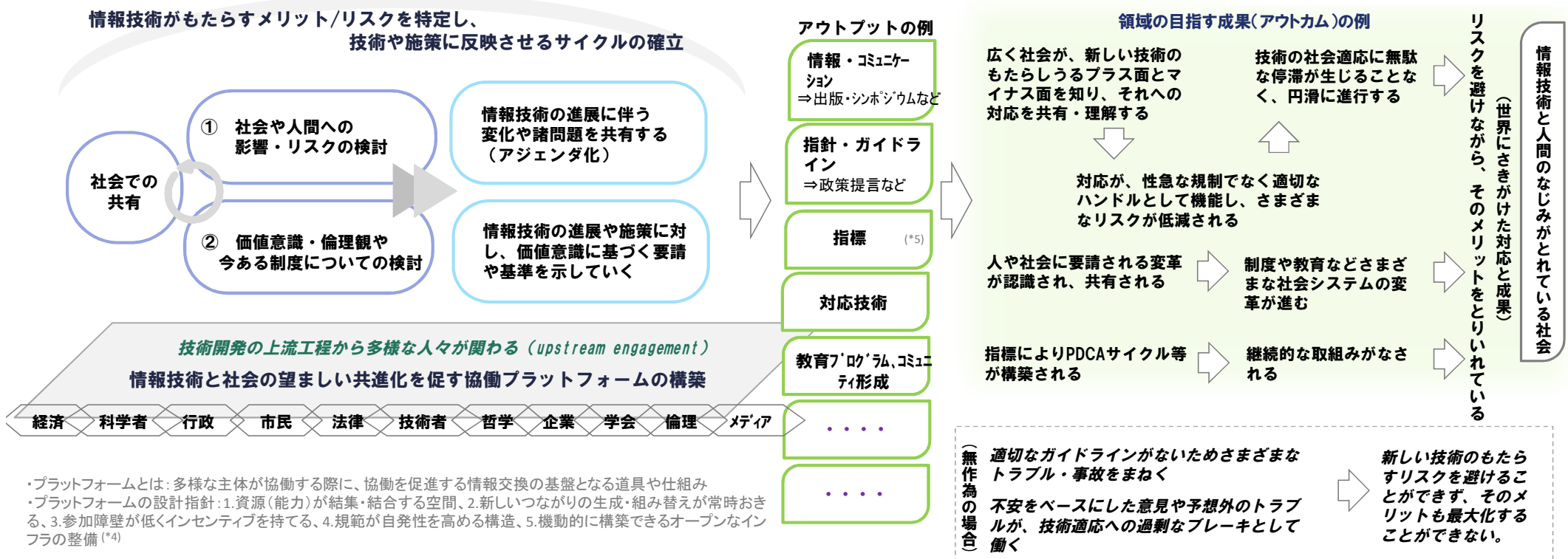
(*1) Pew Research Center(USA):2025年までに「人工物」=Robotが仕事を奪うかを1896人の専門家にインタビュー調査、48%は悲観的、52%は楽観的な回答。ロボット操作での事故に関して、ロボット製造者/所有者の責任についても見解がわかる結果。
(*2) 江間有沙:「人工知能と未来」プロジェクトから見る現在の課題,人工知能学全国大会2015予稿集
(*3) 西下佳代,茅明子,矢島彰夫,奥和田久美,「人工知能やロボットの社会的影響に関する先行的研究動向」,第30回研究・技術計画学会予稿論文集,2015
(*4) 国領二郎「ソーシャルな資本主義 つながりの経営戦略」日本経済新聞出版社,2013.
(*5) 領域成果のKPIとなるものを想定。なじみ指標、研究者の社会リテラシー、非専門家の科学リテラシーなど
(*6) 浦昭二ほか「情報システム学へのいざない」培風館,1998

目的

情報技術と人間のなじみがとれている社会を目指すために、情報技術がもたらすメリットと負のリスクを特定し、技術や制度へ反映していく相互作用の形成を行う。

- 情報技術がもたらす変化(正負両面)を把握・予見し、アジェンダ化することで、変化への対応策を創出する
- 情報技術の進展や各種施策に対し、価値意識や倫理観、また今ある制度について検討し、望まれる方向性や要請の多様な選択肢を示していく

これにより情報技術と人間のなじみがとれた社会(*6)を目指す。そして、その状態をここでは「人と情報のエコシステム」と呼ぶ。



・プラットフォームとは:多様な主体が協働する際に、協働を促進する情報交換の基盤となる道具や仕組み
・プラットフォームの設計指針:1.資源(能力)が結集・結合する空間、2.新しいつながりの生成・組み替えが常時おきる、3.参加障壁が低くインセンティブを持てる、4.規範が自発性を高める構造、5.機動的に構築できるオープンなインフラの整備(*4)

(無作為の場合) 適切なガイドラインがないためさまざまなトラブル・事故をまねく
不安をベースにした意見や予想外のトラブルが、技術適応への過剰なブレーキとして働く

新しい技術のもたらすリスクを避けることができず、そのメリットも最大化することができない。